
(令和5年8月17日掲載)

やさしい日本語で包括的な社会を



尾崎 裕子 (おざき・ひろこ)

高知県文化国際課・日本語教育総括コーディネーター。1960年、高知市生まれ。東京外国語大学インド・パキスタン語学科卒。オーストラリア国立大学アジア研究科修士課程修了。1980年代より日本語教育に従事。1997年から2021年まで国際交流基金派遣専門家としてオセアニア、アジア、欧州など7カ国で日本語教育に携わる。2022年より現職。

私は2022年4月から、県日本語教育総括コーディネーターとして活動しています。少子高齢化が進む高知県では、近年外国籍の住民が増加し、今や特産のハウス野菜作りも、カツオ漁も、外国人労働者なしには成り立たなくなっています。

高知県の外国籍住民の数は全国の中では少ないほうですが、それでも2022年6月には5000人を超えました。しかし、技能実習生などの形で就労している外国人のほとんどが地域の日本人コミュニティと接点がなく、外国人は日本人から見えない存在となっています。「外国人と日本人の共生」や「地域日本語教室での住民の交流や居場所づくり」は、多くの一般市民にとってまだまだ「他人ごと」というのが実情だと思います。

2019年、国は日本語教育推進法を策定し、地域日本語教育の体制づくりは都道府県の責務となりました。これを受けて、県では2021年度に「日本語教育の推進に関する基本的な方針」を策定し、2022年度から県内の地域日本語教室の拡充に本格的に取り組み始めました。外国籍住民の多い市町村と県、県国際交流協会、日本語ボランティア団体など関係団体や人をつないで、新しい地域日本語教室を開設したり、既存の教室の円滑な運営、活動の支援をしたりするのが私の仕事です。

2023年6月現在、県内10市町村に地域日本語教室があり、地域の外国人と日本人ボランティアが集まって、交流したり、外国人の日本語学習を支援したりしています。そこで使われるのが「やさしい日本語」です。

「やさしい日本語」は、元々1995年の阪神淡路大震災で外国人が多く被災したことから、多様な言語を話す外国人に必要な情報を伝える手段として研究が始まりました。その後、多文化共生の地域社会での共通言語として、役所や病院、図書館などで外国人への対応

で使われたり、ろう児への教育にも活用されたりするなど、より広範囲に、言語的に弱い立場にある人へのサポートとして普及が進められています。

新しい地域日本語教室開設後の最初のクラスでは、参加する外国人と日本人ボランティアがお互いに自己紹介した後、ボランティアが外国人参加者の登録フォームの記入を手伝います。その時に、丁寧に話そうという気持ちから、日本人はつい「〇〇と申します」「ご出身はどちらですか」など、敬語を使ったり、文を長く続けたりしがちです。外国人が「何？」という表情をするのを見て初めて、「敬語は難しいかな？」とか「じゃ、もっと分かりやすく言ってみよう」と、ボランティアは気づきます。

外国人を受け入れるということは、必然的に社会に変容をもたらすものだと思います。多様な言語や文化を持つ人に対して寛容であり、多様な人々が対等な関係で地域で共生していけるような開かれた社会をつくっていく覚悟が今私たちに求められているのではないのでしょうか？

町で困っている外国人を見たら「だいじょうぶ？」と「やさしい日本語」を使って声をかけてください。勇気がいることですが、そこから社会を開く小さな一歩が始まります。「やさしい日本語」の根本は、「分かり合いたいという気持ち」と「思いやり」だと思います。私たち自身も多様な言語や文化を学び、多言語社会を目指す努力を続けながら、「やさしい日本語」をうまく活用することによって、多文化共生がみんなの「自分ごと」となるような包括的な社会をつくっていければいいなと思います。



南国市国際交流協会が開いている日本語教室